戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

PDF版第12号　2026年5月号

4月10日発行



3･17高市訪米反対！官邸前行動

特集 イラン戦争下で高市政権を考える

【巻頭言】 戦時下の国家改造を目指す高市政権が国家情報局創設等の悪法成立を阻止しよう！

通常国会後半は、国家情報会議・局設置、防災（戦災対処）庁設置、国旗等損壊罪、旧制単記制導入、衆院議員定数削減などの悪法ラッシュとなる。国家安全保障局・国家情報局を両輪とした「大統領的首相」主導体制を構築し、平素からの情報戦態勢及び緊急事態条項追加改憲を先取りする現代版の疎開・強制疎開＆防空（訓練）態勢を整備する。税制に係わる「国民会議」方式で国会を空洞化し、比例選出議員削減で反対野党を消滅させ、明文改憲へ突き進む。血統主義的国籍法ともリンクしている家父長制的家意識を再生産する戸籍制度を再編強化しつつ、国家への忠誠義務を強化する。加えて経済的には、危機管理投資に代表される軍需関連産業を国家主導で育成する。高市政権は、こうした国家改造計画を進めているのだ。

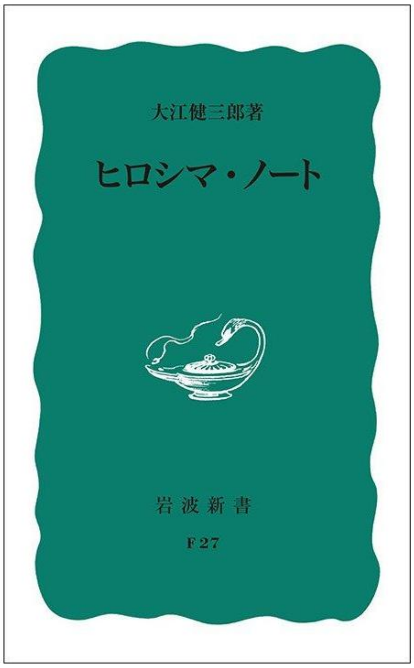
しかも、それは、対イラン戦に投入される在日米軍を基地供与で支え、状況次第では自衛隊の“戦地派兵”もあり得る情勢の下で、進められている。ガザ虐殺戦争も終わっていないし、ウクライナ戦争も終わりが見えない。キューバなどへの武力行使も、何時あってもおかしくない。そんな戦争とその火種が蔓延する中で自らの「台湾有事＝存立危機事態」発言で日中の緊張を激化させつつ国家改造を進める高市政権を許してはならない。

（文責:池田五律）

【活動日誌 ３月10日〜４月９日】

３月 14 日　高市訪米・トランプ会談に反対する３・14 集会　お話　太田昌国さん
　主催：戦争・治安・改憲ＮＯ！総行動実行委員会＋α　17 日には以下。
３月 17 日　武力に物を言わせるトランプ米大統領と会談するな！　高市訪米に抗議する首相官邸前行動
３月 22 日　ヘイトスピーチ許さない・練馬　光が丘情宣
　※16 日には区長選立候補者・吉田健一さんに要請手交
３月 26 日　開くな！憲法審査会 明文改憲も実質改憲も許すな！国会行動　主催：総行動＋α
　増税軍拡予算反対！　許すな！国旗毀損罪・国家情報局創設・防災庁設立
　やめろ！熊本・静岡への長射程ミサイル配備
３月 29 日　高市もトランプもイヤだ！池袋アクション
３月 30 日　成立させないぞ！増税軍拡 2026 年度予算　許さないぞ！熊本・静岡への長射程ミサイル配備　防衛省交渉
　主催：大軍拡と基地強化にＮＯ！アクション 2025
３月 31 日　長射程ミサイル健軍・東富士配備抗議防衛省行動　主催：大軍拡と基地強化に NO！アクションなど

■大江健三郎『ヒロシマ・ノート』読書会（2026 年３月 10 日＠藍苑）報告



　チューターは大江が 1963〜64 年の広島訪問を軸に、被爆者や医療関係者、運動家の姿を描きながら「人間の尊厳」「威厳」といった倫理的テーマを探究している点を解説しました。被爆者を「広島について沈黙する権利を持つ人々」としつつ、被爆体験を語ることによって人間の威厳を回復する可能性を見出そうとしたと分析しました。また、原爆病患者の宮本定男や広島原水禁運動の森瀧市郎らを「真に広島的な人間」として描き、そこに戦後日本の道徳的再生の象徴を見ようとしていることも指摘しました。

　しかしこの「真に広島的な人間」という概念や、作中で頻繁に用いられる「日本人」という言葉に関連して、大江の議論は広島の被爆体験を日本の新しいナショナリズムの象徴として位置づける傾向があり、後の歴史認識から見ると、日本の加害責任や植民地支配への視点が十分ではないという限界があると批判しました。また、被爆者の遺伝問題や障害の描写についても、今日の観点からは差別的な意識が反映されている可能性があると述べました。

　参加者から大江を政治的指導者ではなく文学者として読むべきであり、1965 年という時代状況を考慮すれば、加害責任の問題が十分に語られていないことで評価しないのは適切ではないと述べました。別の参加者は同書が戦後文学において「広島という物語」を形成した重要な作品であると指摘しました。被爆体験の語りは、恥や沈黙から語りへと移行する過程で、戦後日本の国民的物語を形作った側面があるが、それは同時に日本の被害者性を強調し、加害者性を忘却させる機能を持った可能性もあると分析しました。広島・長崎の被爆神話がアメリカとの関係の中で形成された可能性についても言及しました。また別の参加者は、前半では広島の現実から主体的に思考しようとする姿勢が見られ、一定の評価が可能ではないかと感じたが後半では特定の人物を称揚する語りが強まり、聖化の印象を受けるとも指摘しました。さらにその方法論は、敗北の経験から主体を立ち上げるという竹内好の思想と似た側面を持つが、現実の広島に強く結びつくことで聖人化の問題が生じていると分析しました。

　終盤では 1980 年代の反核運動や戦後左翼運動の歴史にも話題が広がり、戦後の平和運動がどのような政治的文脈の中で展開してきたのかについても議論が行われました。

　同書は戦後日本の思想状況を理解するうえで重要な歴史的テキストである一方で、その語りがどのようなナショナリズムや被害者中心の歴史観と結びついていたのかを批判的に読み直す必要があることを確認した読書会となりました。

（AI）

当日のレポートの内容を読書会当日の論議を踏まえてブラッシュ・アップした論考を、**【戦争・戦後体験を読み直す②】**として、7 月 10 日発行号に掲載する予定です。

＜資料＞ Ｊアラート避難訓練に係わる資料集

1)練馬区議会2026年度予算特別委員会議事録(３月５日･木)全款補充質疑(１日目) 質問者:山崎まりも区議

○福沢 剛委員長 次に、生活者ネットワーク、どうぞ。

○山崎まりも委員 95 ページ、5、防災無線維持運営費 6,400 万円余に関連して伺います。区では**全国瞬時警報システムＪアラート、全国一斉情報伝達試験**を行っています。年に何回、どのような内容で行われているのか伺います。

○区民防災課長 まず、Ｊアラート全国瞬時警報システムは、緊急地震速報や大雨特別警報、弾道ミサイル情報など、対処に時間的な余裕がない事態に関する情報を国が人工衛星を介して自治体に送信する仕組みでございます。区では緊急地震速報が発表されたときなどにおいて、区民の皆様一人ひとりの状況に合った適切な避難行動につなげていただけるよう、防災行政無線や緊急情報メールなどにより区民の皆様にお伝えしているところです。また、システムの動作確認のため、全国一斉情報伝達試験を実施しております。国の試験に合わせまして、区では**年４回、無線放送塔からの試験放送**を行ってございます。

○山崎まりも委員 年に 4 回行っているということです。区のホームページでは弾道ミサイルが落下する可能性がある場合に取るべき行動について、屋外にいる場合は近くの建物の中や地下に避難、建物がない場合には物陰に身を隠すか地面に伏せて頭部を守る、屋内にいる場合は窓から離れるか窓のない部屋に移動するなどと案内しています。以前、弾道ミサイル落下を想定した避難訓練が大江戸線練馬駅構内で実施されていました。検証も伴わず、現状は住民の不安を高めるだけの訓練になっており、やるべきではないと私たちは考えています。東京都教育委員会からは区内の小中学校にミサイルが飛んでくるときにはＪアラートが流れるというチラシが配られています。**区内の小中学校では弾道ミサイルが落下することを想定して、どのような訓練が行われているのか、実施校数などとともにお答えください。**また、訓練に対して子どもたちから不安に感じる声などがあった場合の対応についてもお答えください。

○教育指導課長 本年度の実施校はまだ調査が完了しておりませんので、昨年度の実施校についてお答えいたします。**小学校 16 校、中学校 7 校**でございます。実施内容につきましては、**授業中にＪアラートが発生した場合には速やかに建物の中に避難すること、建物の中では窓ガラスからできるだけ離れた場所に避難すること**の２点でございます。子どもから不安に感じる声については、特段そのような課題は伺っていないところです。学校においては東京都教育委員会の安全プログラムを参考として、地震や津波、火災、弾道ミサイル発射時の安全など、様々な災害発生時における危険とその対処を目的とした避難訓練が実施されています。実施の際には児童・生徒の心のケアを十分に行うようにしています。

○危機管理室長 国民保護に関する根本的な御発言もありましたので、私からも答弁いたします。国民保護につきましては、武力攻撃や大規模テロなどから区民の生命を守るために大変重要なものでございます。区としても、**区民への正確な情報提供や円滑な避難誘導などの役割を果たしていくために、準備をしっかりと進めてまいります**。

○山崎まりも委員 2 月 28 日に、アメリカはイスラエルと共に首都テヘランや各都市を攻撃し、多数の市民や小学校への爆撃により 160 人以上の子どもたちの犠牲もありました。双方に死者が出ていると報道されており、国際情勢は極めて不安定な状況です。ユニセフは、遠い地域の紛争でもニュースや画像を繰り返し目にすることで、子どもたちは自分自身にも危険が及ぶのではないかと感じる可能性があると指摘しています。日々、戦争の様子が報道される中、自分の学校でミサイルが飛んできたときの訓練があったら不安を抱く子どもたちが一定数いる可能性は否定できません。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、子どもと戦争について話すときの５つのポイントを示しており、その中には、子どもの年齢に応じて話すこと、世界中の大人が問題解決に努力していることを伝え安心を促すこと、子どもによる平和への活動を紹介すること、現実的な手助けを応援することなどがあります。これらの対応は保護者だけでなく学校の先生にも必要なものと考えます。地震などの災害を想定した訓練は必要ですが、このような対応がないまま不安だけをあおる弾道ミサイル発射を想定した訓練は行うべきではないと考えます。戦争は始まったら止められないことを前提に、起こる前に何が必要なのか、平和や国際理解を共に学ぶことが必要と考えます。区の考えを伺います。

○教育指導課長 先ほども答弁させていただきましたが、こちらの件は**都の安全教育プログラムにのっとって実施しているものであり、適正**なものと判断しております。

○山崎まりも委員 危機管理教育は子どもに過度な不安を与えないよう、そもそも戦争が始まらないよう、対話による国際理解や多文化共生の理解を深めることが必要だと訴えて、次の項に移ります。

2)練馬教育問題交流会メンバーと大泉南小学校校長との面談より「Ｊアラート訓練について」の部分

Ｑ：Ｊアラート避難訓練について伺います。

Ａ：昨年度もお話した通りです。私は実施した方がいいと思うのですが、年に11回の訓練では、Ｊアラート訓練をする時間的な余裕がありません。

Ｑ：時間的な余裕がないというのは？

Ａ：例えば、副校長、防災主任と私以外の教職員は、日時、時間、内容を知らされていない訓練をしています。突然なので、いろいろな課題が判ります。またこの地区の第一次避難場所は大泉二中なので、そこまでの避難も実施しています。

Ｑ：全校児童で移動するのですか。

Ａ：そうです。大変です。

Ｑ：大泉南小独自のさまざまな訓練をされているということですか。

Ａ：その通りです。なので来年度もＪアラート訓練ができるかどうか分かりません。

【呼びかけ＆集会案内】

■米軍がベネズエラ再攻撃やイランに地上部隊を投入したら･･･
キューバなどへの攻撃をしたら･･･　集まれ！アメリカ大使館抗議行動

攻撃が午前の場合：当日18：30　攻撃が午後の場合：翌日18：30

住友不動産虎ノ門タワー（旧JTビル）前集合　呼びかけ：戦争・治安・改憲ＮＯ！総行動実行委員会＋α

自衛隊のホラズム海峡派兵を決定したら　集まれ！首相官邸抗議行動

決定が午前の場合：当日18：30　決定が午後の場合：翌日18：30

■監視しよう！　抗議しよう！第１師団創立64周年・練馬駐屯地創立75周年記念行事

4月12日（日）10：45 東武練馬駅南口集合　11：00～12：00 正門前抗議情宣

呼びかけ：北部労働者共同闘争会議（03-3961-0212）

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション　毎月第2月曜日学習会「昭和100年」政府式典に異議あり！

4月13日（月）19：00　サポート練馬　問題提起：中川信明さん（練馬教育問題交流会）

■フィールド・ワーク　狛江・玉翠園と在日朝鮮人の痕跡を訪ねる

4月18日（土）14:00　小田急線「狛江駅」改札口集合　呼びかけ　ヘイトスピーチ許さない！練馬

参加希望者は090－5208―5803（池田）まで　先着あと３名は受けつけます

■開くな！憲法審査会 明文改憲も実質改憲も許すな！国会行動
国旗毀損罪・国家情報局創設・防災庁設置反対！　自衛隊明記改憲を許さないぞ！

4月23日（木）11：00～13：00　衆議院第二議員会館前　主催：総行動＋α

■知っていますか？　防災庁設置法案
表の顔は「防災」 裏の顔は平素から復旧・復興にまで至る「戦災」対処の司令塔!?　4・24学習会

日時　4月24日（金）18：15開場　18：30開始　会場　神保町区民館・和室　資料代　500円

主催　米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会

■社会運動史読書会　高原太一『砂川闘争とは何か』（法政大学出版局）

4月24日（金）17：20～　武蔵大学02-C会議室（教授研究棟２階）　※詳細８P

■国家情報局創設に反対する4・25集会　お話　小倉利丸（としまる）さん（JCA-NET）　主催：総行動＋α

4月25日（土）18：15開場　18：30開始　文京シビックセンター５F・会議室C　※資料代500円

■戦争反対！平和憲法守れ！練馬集会＆パレード　5月3日（日）　10：00　豊玉公園

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション　毎月第2月曜日学習会
イラン戦争の下の通常国会　国家情報局設置、防災庁設置、「旧制単記」制度化、国旗毀損罪創設、衆議院定数削減･･･そして蠢く明文改憲策動と“戦地派兵”模索　総点検！高市政権の目論見

5月11日（月）19：00　サポート練馬

■三線物語@ねりま（ねりま市民望年会プレ企画）　日時：５月16日（土）　18：30開場　19：00開始

会場：ココネリホール　会場協力金：1000円　主催　ねりま市民望年会支度人会　※詳細は21P

■予告　戦争反対！高市政権をぶっ飛ばせデモ（仮）　5月30日（土）午後を第一候補に調整中

【防衛省・自衛隊動向(３月１日～３月31日)】

３月１日　小泉防衛大臣、「今回の米国の軍事行動の評価について、小泉大臣として支持するのかどうかの立場聞かせてください」との記者の質問に「国際的な核不拡散体制の維持のためにも、イランによる核兵器開発は決して許されません」と回答。続く記者の「それは、つまりアメリカの攻撃を支持するという意味でおっしゃられているんでしょうか」との質問に対して、「政府全体としてはそういう立場です」と回答。

３月２日　住民説明会で、与那国へのミサイル部隊配備は2030年であることが明らかに。

３月４日　小笠原に防空識別圏を設定することを検討していることが報道で明らかに。

３月５日

・那覇基地（沖縄県那覇市）を拠点とする海上自衛隊第５航空群、Ｐ１哨戒機１機を配備。

・高市首相、CIA（米中央情報局）やFBI（連邦捜査局）、国防総省など米国の政府機関と深い関係を築き、機密データの解析や国家安全保障に関わるプロジェクトを手がけてきたティール・パランティア・テクノロジーズ社共同創業者兼会長による表敬を受ける。

３月６日

・防衛省・自衛隊の組織改編や人的基盤の抜本的強化についての「防衛省設置法等改案」提出。

・日加防相会談。防衛産業間の協業を推進するために調整を加速させることで一致。

・音響測定艦「びんご」の引渡式・自衛艦旗授与式を三菱重工マリタイムシステムズで実施。

３月８日　・熊本・健軍に長射程ミサイル発射機搬入。

・イラン周辺国から退避を希望する日本人の輸送に備え、航空自衛隊の「KC767」空中給油・輸送機がモルディブに向けて出発。

３月９日　航空自衛隊新田原基地で日米共同訓練が始まる。新田原基地での同訓練は一昨年10月以来。

３月10日

・沖縄南方で、海自、海保、共同訓練。・3,000トン型潜水艦「ちょうげい」の引渡式を三菱重工神戸造船所で実施。

3月11日　練馬駐屯地所属部隊、徒歩行進訓練。

> **〔のむら説区議からの報告〕**
> **のむら区議の目撃証言**　今朝７時頃、豊島園駅前を練馬駅側に隊列を組んで行進する自衛隊を見ました。ゼッケンの文字は視認できませんでしたが、震災15年にちなむ訓練でしょうか・・・。
> **のむら区議による危機管理課長聞き取り**　自衛隊の歩行訓練の件、危機管理課長から聞き取りしました。今回は区役所に立ち寄らなかったので区への事前通告はなかった模様。発災時、交通インフラが途絶えたことを想定した情報連絡員の訓練でした。練馬区を通過した隊列の数および参加隊員の数はいずれも不明。

３月12日　・護衛艦「おおなみ」、スリランカ海軍との親善訓練で、コロンボ沖で戦術運動など実施。

・護衛艦まや、きりしま、横須賀で「日米共同統合防空・ミサイル防衛(防勢)訓練」を実施。日米共同対処をシミュレーションで演練。

３月13日

・神奈川県横浜市にあるJMU（ジャパンマリンユナイテッド）横浜事業所磯子工場で、海上自衛隊向けに新規建造された哨戒艦２隻（乗員30名）の命名・進水式。

・陸上自衛隊の日本原演習場に、単独訓練を行うアメリカ軍が到着。岩国基地（山口県）所属の「第36戦闘補給部隊」から最大で約100人が参加。15日から射撃や救護などの訓練を行なう。

３月14日　海自、パプアニューギニア国防軍と親善訓練　ポートモレスビー港内で通信訓練

３月15日 護衛艦あさひ、飛行幹部候補生の練習航海でマレーシア、インドネシア、ベトナムへ　4月26日まで

３月17～21日　海上自衛隊とオーストラリア海軍との共同訓練

３月17日　イージス・システム搭載艦１番艦用米国製装備品による標的探知試験を米国で実施　19日も

３月19日　日米首脳会談

３月20日　日米オランダの戦闘機による共同訓練「風車ガーディアン」が三沢で始まる　4月3日まで

3月24日　自衛隊員、中国大使館襲撃。

３月27日　海上自衛隊で初、イージス護衛艦（ちょうかい）、トマホークミサイル発射可能に。

３月28日　宇宙作戦団新編　・小泉防相、硫黄島での日米合同慰霊式で「太平洋防衛構想室」、4月新設を発表。

３月31日　長射程ミサイル、健軍・東富士駐屯地に強行配備。

【チェックポイント】安保戦略三文書の改定作業が始まった

大内要三（日本ジャーナリスト会議会員）

イラン戦争の最中に、高市首相は訪米し、トランプ米大統領と会談した。高市首相は、訪米を終えて、かねてから進めるとしていた安保三文書の改定作業を加速させる。その動向について執筆していただいた。（編集部）

唐突、性急な提起

高市首相は安保戦略三文書を年内に改定するという。昨年10月24日の所信表明演説によれば、理由は「新しい戦い方の顕在化など、様々な安全保障環境の変化」であり、この２月20日の施政方針演説では「長期戦への備え」が加わった。唐突、性急であり、あまり必然性が感じられない。10月20日の自民・維新連立合意書にも三文書改定の文字はなかった。

三文書は2021年12月に策定されたが、国家安全保障戦略も国家防衛戦略も「おおむね10年の期間を念頭に」であり、防衛力整備計画も別表１の「目標と達成時期」は「27年度までの５年間」と「おおむね10年後まで」となっていた。予定通り防衛力整備計画のみ改定すれば良かったはずだ。

2025年版の『防衛白書』は三文書の概要紹介に16ページを割き、このなかで「反撃能力「抑止力」については解説コラムも掲載した。昨年８月にこの白書が発行されるまでは、日本の防衛戦略が変わることなど想定されていなかったのだろう。防衛省防衛研究所の小熊真也氏が「防衛戦略の変化と継続性」と題して『安全保障戦略研究』誌に三文書の意義を書いたのは昨年５月のことだった。また防衛省の諮問機関「防衛力の抜本的強化に関する有識者会議」は昨年５月の報告書で「防衛力の強化のための施策を着実に実施するとともに、現在の安全保障環境に対峙する中で、更なる強化のための取組を不断に検討し、進めていくべきである」と書いているが、三文書の改定が必要などとはまったく書いていない。



性急に日本の軍拡の速度を上げねばならないとすれば、それは軍事合理性からではなく、トランプ大統領・高市首相という最悪のコンビが誕生したからではないのか。安全保障環境が厳しくなったというが、日本に軍事侵攻できる能力のある仮想敵国などない。挑発あるいは偶発的衝突の拡大によってしか戦争は起こらないからこそ、外交による相互の軍縮が必要だ。しかし９兆円を超える防衛予算を「仕分け」する能力を、残念ながら今国会は失っていた。

「新しい戦い方」とは

「新しい戦い方」は、兵器でいえば、ウクライナやガザでの、電子戦や無人機の多用などを意識しているのだろう。しかし現行の安保戦略三文書は防衛力の「抜本的強化」として、それらを折り込んでいるはずだ。

スタンド・オフ防衛能力としての各種ミサイルはすでに開発が進み、配備の段階に進んでいる。誘導弾の「12式」を「ひとにしき」と読むことは一般化した。総合防空ミサイル防衛能力はイージス・アショア代替艦の建造は進んでいるし、迎撃ミサイルでは日米共同開発のSM-3ブロックⅡＡや、ライセンス生産のPAC-3MSEも配備が始まっている。無人アセット（ドローン等）は、ガザで性能が実証されたイスラエル製こそ採択されなかったが、AI活用の無人機（UAV）、無人水上艇（USV）、無人潜水艇（UUV）はいずれも開発・導入が始まっている。領域横断作戦能力については、新たに護衛艦12，潜水艦5、哨戒艦10、F-35A戦闘機40、F-35B戦闘機25などが、また機動展開能力についても輸送船８、輸送機６、空中給油機13の配備が決まっている。見られるように専守防衛のためでなく米軍とともに遠隔地まで出撃できる能力構築をしている。それは2015年の安保法制による集団的自衛権の部分的行使を実施するのに十分なものだ。

そして昨年には統合作戦司令部が発足し、米インド太平洋軍司令部と定期協議をすることで、自衛隊・米軍の一体化はさらに進んだ。2015年の「日米防衛協力のための指針」（第3次ガイドライン）が安保法制と一体のものであったように、ともに戦う準備はできた。

興味深いことだが、ウクライナ戦争の教訓について、６人の防衛省防衛研究所のメンバーの共著で『「新たなる戦争」の諸相』という本が昨年４月に公刊されている。これは「台湾問題にウクライナ戦争が与えた影響に関して、『新たなる戦争』の諸相という軍事的側面から研究を行うもの」（序章）だった。第１章ですでに結論は示さ

れているが、「ウクライナ戦争では無人機の積極的な運用、サイバー・電磁波空間の重要性、認知領域での戦いなどが注目されたが、それらは人民解放軍が 2014 年頃から進めてきた『情報化局地戦争』と招来戦のために今後推し進めていくであろう『智能化戦争』という軍事ドクトリンの正しさを証明するものであった」という。つまりウクライナ戦争が示した「新しい戦争」に対応する準備は、すでに中国軍は 10 年前から進めているというわけだ。

さらに第１章では「人民解放軍が 2027 年のような短期的な時間軸において台湾侵攻作戦を実施する蓋然性は少ない」「中国はリスクとコストが高くなることが予想される武力行使に踏み切ることを基本的には望んでいない」という。ただし「中長期的に見れば」「米国およびその同盟諸国、台湾が十分な防衛力強化を実現しない状況で」「『新質戦闘力』の強化にも成功した場合には、台湾有事の危険性は一層増していくだろう」という。

このような冷徹な分析は、目前の台湾有事の危険性を煽るものとは全く異なっている。著者たちの意図とは異なるだろうが、互いに同じような軍拡を進めていること、つまり軍拡競争こそが危機を呼ぶ、と読むことができる。

衰退する米帝国の補完

高市首相の経歴や従来の主張からすれば、日米同盟堅持ではあっても、必ずしも熱心な軍拡派ではないように思われる。ではなぜ中国との融和の努力をせず、軍拡の速度を速めようとするのか。そこでは米国の衰退に伴う米安保戦略の変容を見る必要がある。

米大統領は任期ごとに国家安全保障戦略を発表する。第１次オバマ政権の国家安全保障戦略（2010 年）は、中国の発展と国際社会への関与拡大を歓迎していた。第２次オバマ政権の同文書（2015 年）は、中国の経済・軍事的発展に脅威感を覚え、米軍は中東から太平洋にシフトした。第１次トランプ政権の同文書（2017 年）は、中国・ロシアに正面から対抗するものとなった。バイデン政権の同文書（2022 年）は、インド太平洋で中国と対抗するために同盟国との共同を重視した。そして第２次トランプ政権の同文書は、欧州・アジアから撤退し西半球に鍵っての覇権を求める傾向を明らかにした。いわく「米国がアトラスのように世界秩序全体を支えてきた時代は終わった」「同盟国に対し自地域における主たる責任を担うよう求める」「米国の国家安全保障に対する相対的重要性が低下した戦域からの撤退を図る」。朝鮮に対しても中国に対しても、軍事的に対抗する中心部隊は、「核の傘」を別とすれば、米軍ではないことになる。

この１月に米戦争省（もと国防総省）から発表された国家防衛戦略でも、中国を「最重要の戦略的競争相手」とするが対決姿勢は薄れ、台湾問題には具体的には言及していない。

３次にわたるガイドラインを通じて米軍との一体化を進めてきた自衛隊は、共同作戦においても、独自の判断での行動はできないとしても、より重要な役割を果たさねばならない。高市首相は、わざわざ東京までやって来たトランプ大統領との昨年 10 月 28 日の会談で、そのことを言い含められたはずだ。合意文書には具体的なことは何も書かれていないが。そして、だからこそ１月 26 日のテレビ党首会談で高市首相は、昨年 11 月の台湾有事に関する「高市発言」について追及され、「米軍が攻撃された場合、日本が対応しなければ、日米同盟を維持することはできない」と述べた。台湾有事では自衛隊は米軍とともに重要な役割を果たす、と言ったに等しい。

改定への手続きは進む

2022 年の安保戦略三文書は、2013 年の国家安全保障戦略・防衛計画の大綱・中期防衛力整備計画を改定したものだった。改定に当たっては、15 回の防衛省の「防衛力強化加速会議」、17 回の「政府と有識者の意見交換」、自民党安全保障調査会の「新たな国家安全保障戦略などの策定に向けた提言」、4 回の「国力としての防衛力を総合的に考える有識者会議」、そして「与党国家安全保障戦略などに関する検討ワーキングチーム」での合意を経て、国家安全保障会議決定・閣議決定となった。この間、岸田首相が所信表明演説で三文書改定を表明してから１年と 10 日をかけている。公明党が与党だった時代だ。

現行三文書の改定には同様の手続きが行われると思われる。すでに昨年 11 月 20 日には自民党安全保障調査会での議論が開始され、４月末までに政府に提出するとした。報道では議論の重点は、防衛装備品輸出のルール緩和、非核三原則の見直し、原子力潜水艦の保有など、とされている（『毎日新聞』）。また昨年 10 月 24 日から防衛省の「防衛力変革推進会議」開催が重ねられ、４月下旬からは有識者会議の設置も予定されている。

防衛力変革推進会議での検討状況を見ると、３月４日の第５回会議のテーマは「防衛力の変革の方向性等について」となっており、関連資料として「防衛力の変革の方向性①　スタンド・オフ防衛能力／統合防空ミサイル防衛／太平洋・シーレーン防衛」が公表されている。

スタンド・オフ防衛能力では主な検討事項は「●スタンド・オフ・ミサイルの実践的な運用のためのターゲテ

ィング能力の強化　●スタンド・オフ・ミサイルと無人アセット等の組み合わせによる効率的な対処の実現　●長期戦に対応できる能力の確保」。

統合防空ミサイル防衛では主な検討事項は「●HGV・ドローン等の新たな脅威に対する迎撃能力の整備　●直接的な迎撃に加え、分散・欺瞞・防空アセットのネットワーク化等も含めた防空手段のベストミックス　●戦闘が長期化しても防空戦闘を継続できるアセット・弾薬の量」。

太平洋・シーレーン防衛では主な検討事項は「●常時継続的な警戒監視・情報収集能力の強化　●太平洋側における防衛能力の強化　●広域における活動能力の強化　●同盟国・同志国等との連携の強化」。

３月 19 日の第６回会議では「『防衛力の変革の方向性』及び『同志国との連携』について」であり、関連資料は防衛省ＨＰでは「現在掲載しておりません」となっている。ただしこの会議での防衛大臣冒頭発言では、「防衛力の変革の方向性」では「①無人アセット、②宇宙、③サイバー、④電磁波、⑤指揮統制・情報通信について議論」とされ、「同志国との連携」では「訓練、部隊運用、装備品、産業基盤などのあらゆる面で相互連結性を高め、有事への対応を含む、一歩進んだ安全保障協力」とされている。

また、3 月 19 日にホワイトハウスが発表した日米首脳会談ファクトシートでは、タイフォンミサイルシステムの日本配備、AMRAAM 共同生産、SM-3 ブロックⅡＡの生産４倍化といった、ずいぶん細かな話が出ている。

ここまでを見る限り、従来路線の強化促進を目指しているにすぎず、本格的な戦略転換、ましてや米戦略補完を離れての日本独自の戦略などありえない。今後は非核三原則見直しや原子力潜水艦配備などがどういう形で出て来るのか、展開を見守るほかはない。　(2026.3.22 稿)

【告知】「社会運動史読書会」始めました！

2019 年より、シリーズ本『社会運動史研究』(新曜社) を共編で刊行してきた (最新は第 6 号)。だが、継続的な社会運動史の「研究会」を行う余力がこれまでなかった。ようやく読書会を始めることができた。

初回として、26 年 2 月 28 日 (土) 一日がかりで武蔵大学で集まりを持った。午前は拙著『流されながら抵抗する社会運動』(現代書館) を対象に、「地域べ平連」を研究する平井一臣さんと市橋秀夫さんからのコメントと松井の応答、その後会場全体で議論した。鶴見俊輔の捉え方から、日常と政治の関係の論点へと議論が進んだ。

午後は、「地域べ平連」の論文集である大野光明ほか編『可能性としてのべ平連』(ミネルヴァ書房) と、新宿「模索舎」の歴史を探究した清原悠編『自由への終わりなき模索』(ころから) の 2 冊を対象とした。前者に対して、黒田光太郎さん (福岡べ平連) と清原悠さん (模索舎本の編者)、後者に対して小杉亮子さん (東大闘争研究) と松井がコメント、その後全体の討論。分量ある 2 冊の合評で議論が絞りにくく、運動史の意義も説明しきれなかったが、何より延べ 30 人超の人たちが集まることができて良かった。

今後も、年数回の開催を目指したい。次回は、

４月 24 日(金)17:20～

武蔵大学 02-C 会議室(教授研究棟２階)にて**高原太一『砂川闘争とは何か』(法政大学出版局)**対して**伊江島土地闘争を研究する岡本直美さんからのコメント**、

高原さんの応答、そして全体で議論を行いたい。
オンライン参加可。
詳細は以下の URL を参照ください。
https://smhrc2026.blogspot.com/



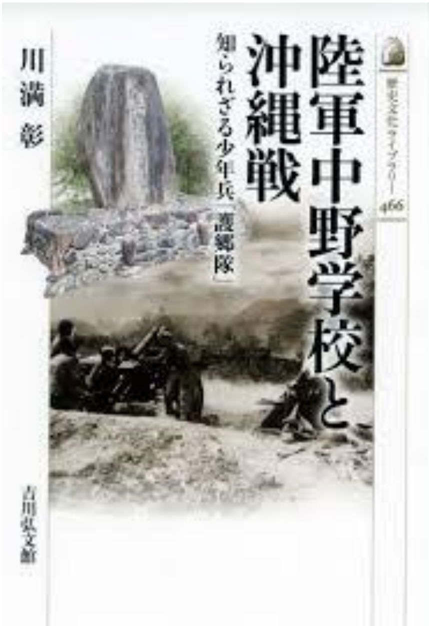
(文責:松井隆志)

特集 イラン戦争下で高市政権を考える

【読書案内】国家情報局・スパイ防止法に関連する諸著作

イラク戦争は、ベネズエラ攻撃に続く、AI の軍事利用の本格化を告げている。だが、AI は事前の膨大な情報の集積があって機能する。その情報の集積をするのが情報機関だ。高市政権は、その創設、国家情報局創設が目論まれている。簡単に言えば、様々な諜報（スパイ）機関の元締めであり、情報戦の司令塔である。手持ちの本の中から、諜報機関・情報戦に関わる本を紹介したい。

内閣情報調査局（内調）を格上げして国家情報局を創設すると言われている。であるからには、内調が何をやってきたかを踏まえる必要がある。よって、第７号で紹介した『内調』（ちくま新書）は必読である。それによれば、内調は、マスコミや研究者を抱き込んだりして世論操作をしてきた。「偽情報」対策、裏返せば権力に都合がよいように世論操作をするということだ。前身の戦中の情報局については、佐藤卓己著『言論統制―情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中公新書）がある。



日本版 CIA「対外調査庁」の創設も目論まれている。アメリカの諜報機関については、マーク・リーブリング著『FBI 対 CIA』（早川書房）。法執行機関である FBI はスパイを逮捕することに集中するが、CIA はスパイを養成し、泳がせる。ロシアに関しては、保坂三四郎著『諜報国家ロシア』（中公新書）がお勧め。

日本の歴史でスパイ養成機関として有名なのは陸軍中野学校。市川雷蔵主演のシリーズ映画もあった。小野田寛郎は、その二俣分校（潜行・謀略・ゲリラ戦幹部の養成を目的とする）の出身だ。読み物として面白いのは、畠山清行著『秘録　陸軍中野学校』（新潮文庫）。中野学校で養成されたスパイの主な任務の一つがスパイの摘発。住民や少年たちを「遊撃戦」に駆り立てただけでなく、教員を装って潜伏した「離島残置諜者」などが沖縄戦でスパイ容疑をかけるなどして住民を殺した。川満彰著『陸軍中野学校と沖縄戦　知られざる少年兵「護郷隊」』（吉川弘文館）は、恐ろしいスパイの本性を教えてくれる。憲兵に関しては、工藤胖（元陸軍憲兵大尉）著『諜報憲兵　満州首都憲兵隊防諜班の極秘捜査記録』（潮書房光人社）。中野学校出身者は、商社マンを装って、中国で阿片ビジネスにも手を染めていた。児玉誉士夫も絡む「昭和通商」だ。それにも触れているのが、斎藤充功著『陸軍中野学校　情報戦士たちの肖像』（平凡社新書）。満州がらみでは、芳地隆之著『ハルピン学院と満州国』（新潮選書）によれば、杉原千畝が卒業したハルピン学院も、スパイ養成機関だったとも言われている。

中野学校の人脈的流れを汲む自衛隊調査学校が何をやってきたかについては、元同学校の創設に関わった山本舜勝著『自衛隊「影の軍隊」－三島由紀夫を殺した真実の告白』（講談社）。副題にあるように、三島と盾の会をその気にさせた顛末が語られている。自衛隊が情報戦で何をしてきたかに関しては、塚本勝一著『自衛隊の情報戦　陸幕第二部長の回想』（草思社）。

警察畑では、北村滋（元国家安全保障局長・内閣特別顧問）著の『情報と国家』（中央公論社）、『外事警察秘録』（文藝春秋）。公安警察に関しては青木理『日本の公安警察』（講談社現代新書）。

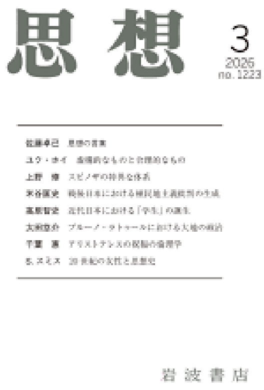


警察庁直轄サイバー部隊や、自衛隊のサイバー部隊は、「能動的サイバー防御」の名で、ネット空間における諜者や偽情報発信源を探知（スパイ）する。電子メールなどいかなる形態の通信も盗聴している監視網として有名なのがエシュロンだ。これに関しては、小倉利丸編『暴かれた全世界盗聴網』（七ツ森書館）がお勧め。

最後に、スパイって言えばゾルゲでしょ！　ってことで紹介するのは太田尚樹著『尾崎秀美とゾルゲ事件』（吉川弘文館）。ゾルゲには治安維持法、国防保安法、軍機保護法。軍用資源保護法の四つ、尾崎にはその内、軍用資源保護法を除く三つが適用された。私は、臨時国会に出てくる「スパイ防止法」に似ているのは「国防保安法」だと思っている。国防保安法について知る上でも、是非、読んで欲しい一冊だ。

文責：池田五律

【雑誌漁り読み】 追悼を兼ね・・・米谷匡史「戦後日本における植民地主義批判の生成」(『思想』2026年3月号)



自分よりも若い知人の訃報に接すると、ガックリくる。米谷さんは1967年生だから、7歳下だ。彼は僕のことを覚えていないと思うが、僕が30歳過ぎで予備校講師を始めた頃、米谷さんの当時のパートナーが予備校の採点者をしていた。その二人が西武線の池袋駅のベンチでパンを食べていて、声をかけられた。若い研究者二人の「マイ・ブルー・ヘブン」的な初々しい姿が今も目に焼きついている。

松井隆志さんから亡くなったと聞いていたが、「思想」3月号に名前があるではないか。早速読んでみると、論文の末尾に編集部の追悼文が付されていた。昨年10月に急逝されたとのことだ。

ところで論文「戦後日本における植民地主義の生成」だが、鶴見俊輔と鈴木道彦の二人を通して、タイトル通りのテーマを探求したものだ。鶴見についての論考の評価は、『流されながら抵抗する社会運動――鶴見俊輔『日常的思想の可能性』を読み直す』の著者である松井隆志さんに委ねたい。一言だけ言えば、「ハーバード大学留学中にアジア・太平洋戦争が始まると、アナーキストの鶴見はFBIに逮捕された」という一節には違和感を覚えた。鶴見は、アナーキズムにも造詣が深かったが、アナーキズムの理論家でも活動家でもない。国家に代表される権威に対しては、反権威主義ではあったが・・・(僕は、鶴見の原点は、厳母家父長制的権威主義への子どもの頃からの馴染めなさだと思っているのだが・・・)。そこらへん含め、松井さんの評価を聞いてみたい。

鈴木道彦についての論考の結論的な文章を、以下、二つ紹介する。

・鈴木道彦は、ファノンと金嬉老を結びつけながら、日本人の民族責任を問いなおす実践として、金嬉老裁判を支援していった。これは、一九六〇年代に生成してきた鈴木道彦の民族責任論、植民地主義批判が、「一九六八年」の衝撃のなかで到達した帰結だったのである。

・鈴木道彦は、1960年代前半から、アルジェリア戦争と「ジャンソン機関」の活動（池田注：アルジェリア戦争下のフランス人脱走兵支援)、「121人宣言」(池田注：サルトルらが署名した「ジョンソン機関」裁判支援声明）に触発されながら、日韓交渉が進むなかで、朝鮮に対する日本人の民族責任を論じていった。そして、李珍宇の思想に強い関心を持ち、金嬉老事件と五月革命という「一九六八年」の衝撃のなかで、植民地主批判を研ぎ澄ませていったのである。

「韓国軍からの脱走兵・金東希や米軍からの脱走兵たちの支援運動を通じて、京都と東京で呼応・連携しながら、鶴見俊輔と鈴木道彦の活動」が「交差」していった過程も、簡潔にまとめられている。また、国民文化会議（総評などが結成）の事務局を支えていた大沢真一郎と、鶴見、鈴木との「接点」にも触れている。総評の存在の大きさを改めて思い知らされる。膨大な注記も含めて、本論文は、「植民地支配の生成」過程とその広がりを、分かりやすく描き出していると言えよう。

「で、その現代的意味は？」、「で、この歴史的体験・記憶をどう生かすの？」ということを、米谷さんは考えていたと思う。この課題を、私たちに宿題として残されたのだと受け止めたい。

その一つとしてふと思うのはイラン戦争に送り込まれた米兵。横須賀から、佐世保から、厚木から、米兵がイラクに送られた。**沖縄から送られた海兵隊は、地上部隊投入となったら、その先陣を切らされるだろう。**自衛隊員の“戦地派兵”のおそれもなくなったわけではない。**高市首相がトランプ米大統領に言った「憲法及び法律上、困難」とは、「改憲したら、法律変えたら・作ったら、海自、ホラズム海峡派兵、米軍後方支援アリ」**ということだ。

今こそ、米兵、自衛隊員に呼びかけねばならない！

行くな！殺すな！殺されるな！逃げよう！

それにしても、鈴木はじめ、「仏文系の反戦平和の水脈があったんだよなー」と、つくづく思う。僕が若い頃までは、平井啓之さんなどと、まだ邂逅する機会が持てた。現在もお付き合いさせていただいている仏文系の人と言えば、杉村昌昭さんと、鵜飼哲さん・・・。

仏文系の反戦平和の地下水脈が吹き上がる日が必ず来る！と信じて筆を擱く。 (文責:池田五律)

【文化欄 反戦歌謡考⑦】三線物語@ねりま(ねりま市民望年会プレ企画)に来てネ

日時:5 月 16 日(土) 18:30開場 19:00開始 会場:ココネリホール 会場協力金:1000 円
主催 ねりま市民望年会支度人会

この原稿を書いている時点ではまだ練馬区長選は告示前だが、ニュースがお手元に届くころには結果が出ていると思います。

願わくば「国民保護」弾道ミサイル避難訓練に率先して立候補するような区長でなくなっていますように。

練馬というところは東京 23 区の中では、世田谷とともに JR の線路（駅）がない区のひとつだ。

区部にあって自衛隊駐屯地（施設）が複数存在するところも共通する。

都市としては比較的大きな JA も農地もある。

そんな練馬区では（だんだん高齢化しているけど）市民運動がとても盛んだと思う。

反面、保守的な地域構造と、都心部に仕事がいくひとが多く寝に帰るだけというひとも少なくなく、選挙結果は世田谷や杉並などとは残念ながら対照的だ。

昨年末、11 回目となった「ねりま市民大望年会」。

初期の頃は高畑勲さんも「支度人」に名を連ね、会場で区民と歓談された。

「練馬アクション」も出店していただいているが、あらゆるジャンルの区内市民グループが（昨年は 36 団体ブース参加）で参加者と交流を毎年重ねている。

その「市民大望年会」のほぼ常連をして、最後に会場をカチャーシーで盛り上げるのが豊岡マッシーさん。

豊岡マッシー（TOYO）さんは、1968 年沖縄県宮古島生まれ、首里育ちの東京在住マルチアーティスト。三線、二胡、島太鼓、歌を操り、沖縄民謡からロックまで幅広く演奏する。YouTube での毎日配信や、三線教室、沖縄文化の講演など関東を中心に活動。イラストや PV 映像アニメ制作も手掛けるマルチアーティスト。

ライブハウスや沖縄酒場などの出演だけでなく、各地のフェスなどにも精力的に出演されていて、映画「宝島」での“指笛”担当でエンドロールに、クレジットもされている。“ダブルネック”の三線や二胡を自在に使いこなし、ご自身のつくられた映像をバックに演奏されたりもする。自作のカレンダーも毎年市民大望年会で販売されている。

そんなマッシーさんが「三線物語」という、一本の三線の名器「馬小」をめぐる沖縄の戦前戦中戦後 3 世代 100 年を描いた大作小説を書かれた。



【沖縄の戦前から戦後へ。
三線の名器「馬小（ウマグヮー）」を手にした三世代のウチナーンチュ。
それぞれの時代を生きた歌三線と愛と家族の物語。
豊岡マッシーの力作です。ぜひお読みくださいね～。
将来的にはこのお話を一人芝居で三線を弾きながら公演したいですー
それで全国を回れるようになりたいな～】

マッシーさんはそこにやはり自作の曲と映像をプラスさせ「三線物語」の公演を始めている。

1 時間におよぶ大作なので、各地ではそのダイジェスト版でなくとなかなかみることができない。

そこで、お世話になっているマッシーさんの「三線物語」フルバージョンをいつか練馬で上演したいねえ、となり、最終的には「ねりま市民大望年会」のプレ企画として、沖縄戦慰霊の日の前にやらせていただくことになった次第です。

イラン侵略、“台湾有事”誘導の中で沖縄はまた最前線にされようとしています。

沖縄に思いをはせる一晩にできればと思います。ぜひご参加を。 **（文責:宮下智行）**

【マイ・ファミリー戦争・戦後ヒストリー番外編】 東京空襲資料展を見て

３月９日大泉学園ゆめりあホール 7 階ゆめりあギャラリーに『東京空襲資料展』を見に行く。パネル展示を、「第 1 章空襲への備え」「第 2 章東京大空襲」「第 3 章戦時下の練馬」「第 4 章都の平和事業」と進み、最後に証言ビデオ（1990 年頃の証言集）を見るという構成。**「隣組による防空の周知」**と**「昭和２０年３月１０日の空襲」**のパネル展示が印象に残った。



「隣組による防空の周知」

・第一次大戦以降、空襲は戦法の 1 つとなっていた為、政府は本土空襲を想定し、防空壕の整備や焼夷弾が着弾した際の消火活動及びその訓練を行うよう呼びかけた。それに大きな役割を果たしたのが隣組とその回覧。隣組とは、戦時中に近隣の家々　10 戸前後で組織された小集団。定期的な会議や回覧板などで情報を共有し、物資の配給や防空活動など戦時下の生活に関わる活動をしていた。しかし同時に住民同士の団結やお互いの監視など息苦しい生活も強いられることとなった。隣組回覧の内容は、東京市が有料で発行していた『市政週報』（後の『都政週報』）などをわかりやすく 1 枚の紙にまとめたもので、頻繁に発行・回覧され、情報が共有された。

・内閣情報局編集の『週報』第 256 号「家庭防空の手引」には、空襲警報の鳴り方、防空壕の作り方、防火に必要な道具類等、非常時にすぐ行動へ移せるよう、様々な覚え事が載っていた。

例えば、空襲警報が発された時の家庭の対応では、部屋の明かりを暗く、又は消すなどして空襲の目標とならないよう、灯火管制の徹底がされていた。又、空襲に遭った際は逃げることはせず、自宅や近隣の建物の消火活動をすることが最優先となっていた。

・隣組の定期的な訓練で使用された防災道具。

1. 火たたき...燃焼している箇所、またはほうきの部分に水をかけ、叩いて火を消す。
2. 砂袋・・・袋に砂を入れ、燃えている場所に投げ消火。
3. スコップ...焼夷弾に砂をかけるためや、焼夷弾の場所を移動させる際などに使用。
4. 筒先...水を汲み上げるホースの先につけるもの。隣組の手押しポンプに筒先を取付けて消火した。
5. 鳶　口...焼夷弾が屋根等に落ちた際には、鳶口で引き寄せ落としてから消火。
6. はしご...屋根に焼夷弾が突き刺さった時などに、建物の上に登る。備え付けのロープはバケツ等の道具の引揚げ・引降ろしに使われた。
7. 防火用水...火災消火の為に水を貯めるもの。コンクリート製で、住宅街の各所に設置された。
8. バケツ...水を運ぶため、隣組員でバケツリレーをしながら消火をしていた。

「昭和２０年３月１０日の空襲」

・昭和 19 年（1944）6 月米軍の攻撃によるマリアナ諸島陥落後、本土空襲が行われるようになった。当初は軍事施設・軍需工場などを標的とした攻撃だった。しかし都心部や住宅が標的となった空襲も徐々に増え始め、被害が多くなっていく。昭和 20 年（1945）3 月 9 日から 10 日にかけての深夜に、300 機を超える B29 爆撃機による攻撃で、東京都および都民に甚大な被害が生じた。約 2 時間にわたる空襲により、当時木造家屋が多く密集していた下町（現在の中央区・江東区・墨田区などの東部地域）の多くの地域で火災が発生。

多発した火災はやがて合流し、大規模な火災となり、東京都の 4 割が焼失。死者は約 10 万人にのぼるともいわれている。3 月 10 日以降も大規模な空襲が続いた。特に 4 月中旬と 5 月下旬には大規模な被害となる空襲があり、都心部の大部分が焼失。6 月以降は軍需工場の多い地域などを中心に立川・八王子地域にも空襲被害が増えていく。

8 月 15 日の終戦を迎える頃には東京の都心部はほぼ全域が焦土と化した。

パネル展示の後に 2 名の方の証言ビデオをみる。

・隣組や焼夷弾が落ちた時の消し方等の訓練は全く役に立たないと分かった。火消しの為に逃げ遅れて亡くなっ

た人もいた。
・当日の玉音放送では、「一億総玉砕。敵を１人でもさしちがえて死ぬ」と放送されるかと思っていた。玉音放送は何を言っているか分からなかった。側にいる父に聞くと「負けた」と。その時「あー。これで着の身のままで寝なくていいんだと思った」との証言であった。

よくこんなんで戦わせようと思ったなぁ！！！　　　嘉藤広子（練馬アクション）

■池田の返歌　**現在版の疎開計画＝国民保護計画も、現代版の防空訓練＝Ｊアラート避難訓練も同じだ！**

【空襲に纏わるエトストラ】津空襲とイラン戦争　　　池田五律

もう二十年くらい前になるだろうか。予備校の生徒と話していて、東京だけが空襲されたと思っていた生徒がいて驚いたことがあった。僕の出身地・三重県津市も空襲されたんだよと話したら、「エッ、あんな田舎もですか。四日市なら工場があっても不思議じゃないけど・・・」と返された。

1945 年７月 28 日、津は空襲された。曽祖父は家もろとも焼け死んだ。鋳物・建築関係の渡り職人あがりの曽祖父は、文字通り「俺が建てた家」であることを理由に「出ない」と言い張り、居残ったそうだ。それで「心頭滅却すれば火もまた涼し」と大往生を遂げたら格好いいのだが、「これはヤバイ」と思ったのか、通りに近いところにあった甕に浸かって生焼け状態で死んでいたそうである。その姿が通りからも丸見えだったため、「池田さん家はお父さんを見殺しにして逃げた」と非難されたそうだ。祖母の怒りは何故か曽祖父の頑固さに・・・。

その７月 28 日。僕らは海に泳ぎに行かなかった。防空頭巾を被った人たちに足を引っ張られると言われていたからだ。「後ろの百太郎」という漫画にも取り上げられている。７月 28 日には、不思議なことが起きる。飛騨川バス転落事故の行方不明者の遺体が流れ着いたこともあった。僕が生まれる少し前、プールが学校になかった時代、水泳の授業で海に入った子どもたちが大量に水死した。「冷水塊」に遭遇したのだと科学的には説明されたそうだが、生き残った生徒たちは「防空頭巾を被った子どもに足を引っ張られた」と証言したと言う。慰霊の女神像が建っていて、７月 28 日には「防空頭巾を被った子どもと水泳着の子どもが一緒に輪になって踊っているよ」と噂されていた。肝試しに行った悪ガキもいたが、そいつらも「見た、見た。逃げた」と噂を裏書きするような話をした。

焼夷弾の油は海面を覆い、潜って水死。息継ぎに浮上して焼け死んだ。父と祖母は海岸線の松並木に逃げたが、松並木も燃え出して、アワや・・・という状況だったそうだ。そして空襲が一段落すると、山に向かった。すると、山に逃げた人が海に向かって来る。すれ違ったそうだ。ドッチに逃げても空襲から逃れられない‼

同じ町内には、直撃弾を喰らって一家全滅した人たちもいたそうだ。

翌日、近郊の農家の親戚たちが様子を見に来た。で、焼け跡を掘り返す。「まるで宝さがしをしているみたいにはしゃいじゃってさ」と祖母は、昨日のことのように恨み言を僕に何度も何度も語った。

ロウソクで有名、一時は液晶のシャープで有名だった亀山。亀山から通学していた中高の同級生から、「家のじいちゃんたちは、オー今日は四日市か、オー津かって、花火見物のように眺めて酒飲んでたそうだ」と聞いた時、祖母が恨み言を言うのもわかる気がした。

なお、松阪の親戚のオジサンは、津の空襲の前の日に、「ネズミが津の方から畑をどーッとやってきた」と言う。ネズミには、地震予知ならぬ空襲予知ができるのか！？　子どもの私は、「へぇー」と聞いていた。

空襲は東京だけが受けたのではない！
でも、「全国民的体験」ではない！　ましてや「経験」ではない！
しかも、戦略爆撃の加害の果ての被害なのだ！
それが、出発点だ。

ところで、昨年死んだ県立高校の体育教師だった父は、ベトナム戦争の頃、「ベトナムでなく俺らの賃金上だ！」「動員なんて戦争中と同じだ！」と教組への文句を、体育教師仲間と酔っぱらって言っていた。その父が、ある日、ベトナム反戦を訴えている学生に、やはり酔っぱらっていて、「カンパをしてしまい」、翌日、落ち込んでいた。そして、TV のベトナム報道を観ながら、「ベトナムの人たちは大変だな。B29 を見上げて逃げたもんな。台風が来ると「潮岬、南南西」とか言うだろう。それが B29 だったんだ」。で、ポツリ。「戦争終わって、灯火管制なくなって、明るかった」。その後は、ラジオからジャズが聞こえたきた話・・・。

イラン戦争報道を観て、ベトナム戦争の時のように、空爆される民衆の身になってシンパシーを感じる人がどれだけいるのだろう。今こそ、空襲される側に身を置いた想像力を！！

【科学哲学への招待⑩】ホワイトヘッド　著『科学と近代世界』(上田泰治・村上至考訳、2025年、中央公論新社)

まずは、前号の【科学哲学への招待】のコーナーについて、ご丁寧な感想を寄せてくださったとしまるさん、ありがとうございます。（& としまるさんが藍苑に遊びにいらしてくださる機会、楽しみにしていますね！）

としまるさんのご期待に添えるようなことを教えて差し上げられるのかはわからないけれど、「アクション科学哲学会」がいつのまにか学際的になっていること、とても嬉しく思いました。大学院時代、私が在籍していた情報科学研究科というところは「学際的な学び・研究の場」を「理念」として掲げていて、実験研究の理系の研究室がたくさんある中に、ポツンと文献研究の「科学哲学」の研究室がある感じでしたが、「科学哲学」の研究室と他の研究室との交流は実質的になかったので…それよりも「いつのまにか学際的」っていいなと嬉しくなりました♪

それから、「アクション科学哲学会」のオフ会のとき、W部さんとも「学ぶことは無限」というお話になりましたが、アルバート・アインシュタインによれば、“Once you stop learning, you start dying.（学ぶことをやめたとき、人は死に向かう。）”　“Learn from yesterday, live for today, hope for tomorrow. The important thing is not to stop questioning.（過去から学び、今を生き、未来に希望を持て。大事なことは問いを立て続けること。）”

私も読者のみなさんに色々と教えていただきながら、双方向的な関係の中で、楽しくこのコーナーを続けていければいいなと思います。（…というより、「【科学哲学への招待】のコーナー、たまには池ちゃんが書いてみるのはどう？」と提案してみても、池田編集長がブンブンと音を立てて首を横に振るため、ずっと私が執筆を担当するコーナーになっているだけなんですよね。このコーナーも、【文化欄】や他のコーナーみたいに、みんなが色々な角度から書くようになっていったら、ますます楽しくなるのではないのかな？と私は思うのですが。）

…で、今回は池田編集長より「宗教と科学」に関連するテーマでの原稿を依頼されたので、「第十二章」がまさに「宗教と科学」というタイトルのアルフレッド・ノース・ホワイトヘッド（1861年2月15日ー1947年12月30日）の著書『科学と近代世界』をご紹介しようと思います。（2026年2月号でバートランド・ラッセルの『怠惰への讃歌』をご紹介した際に言及したホワイトヘッドです。）

日本語版は、『ホワイトヘッド著作集　第六巻』（1981年、松籟社）に収録される形で出版されたのが最初ですが、同じ訳者による新訳バージョンが中公新書クラシックスから出たので、新訳バージョンの方でご紹介しますね。

ホワイトヘッドは、イングランドのケント州生まれで、ケンブリッジ大学で学び、その後、1910年まで同大学で数学の上級講師を務めます。それからロンドン大学に移り、14年には同大学理工学部応用数学の教授となります。ラッセルとの共著『プリンキピア・マテマティカ』（1910ー13年）を刊行し、記号論理学を確立したのが、この時期にあたります。（← 2月号の記事、『プリンキピア・マティカ』となっていました…誤植ですm(_ _)m）　他にも、数学や自然科学が使っている諸概念を吟味する『自然認識の諸原理』（1919年）や『自然という概念』（1920年）を出版したり、アインシュタインの一般相対性理論の代替理論を提示する『相対性原理』（1922年）を出版したりと、イングランド在住期のホワイトヘッドは主に数学者・論理学者・科学者として活躍していたと言えます。

その後、1924年にハーヴァード大学に哲学教授として招聘され、主著『過程と実在』（1929年）を出版して、ホワイトヘッドは哲学者としての功績を残すことになります。（…でも、この説明だと、なんか「渡米した途端に、ホワイトヘッドは哲学者になりましたとさ！」と言ってるみたいで、自分で書いていて可笑しい！！『科学と近代世界』の「訳者あとがき」では、こんなざっくりとした説明ではなく、第一次世界大戦という歴史

的背景も踏まえながら、時期によってホワイトヘッドの業績をどう区分するか、丁寧に書かれています。アクションニュースの主眼を考えたら、そういう歴史的背景に絡んだ話に字数を割いたほうがいいのかもしれないけど…気になる方は「訳者あとがき」を読んでくださいね。）

それで、『科学と近代世界』の原書は、渡米後の講演記録に増補を加えて、1925 年に出版されたものです。そのため、ホワイトヘッドにとっても、読む側にとっても、『科学と近代世界』は＜『過程と実在』への導入にあたる著書＞と位置付けられるのではないかと思います。（ちなみに、『過程と実在』は「ヨーロッパ哲学の最も安全な一般的特徴づけは、それがプラトンへの一連の脚注から成るということである」という一節が有名で…2025 年 8 月 1 日号でご紹介したカール・R・ポパーの『開かれた社会とその敵』では、「ホワイトヘッドの形而上学は、進歩のない思弁」と批判されたりもしています。）

ホワイトヘッドの自然科学観について。これもまたざっくりとした説明になりますが、ホワイトヘッドによれば、「具体者置き違いの誤謬」を基盤に発展してきたのが「自然科学」や「機械論（mechanism）的な世界観」です。「具体者置き違いの誤謬」というのは、「抽象化して作り上げた概念を具体的なものだと勘違いする誤謬」です。たとえば、空間における「点」や時間における「瞬間」は、数学や物理学が抽象化して作り上げた概念で、この世界には存在しないにもかかわらず、「点」や「瞬間」が存在するかのように勘違いするのが、この誤謬ということになります。

「それでは、この世界には何が存在するのか？」というと、存在するのは「出来事（event）」だけで、「出来事」はまわりの「出来事」と関係し合うこと（＝「関係態（relatedness）」）で存在している、というのがホワイトヘッドの見解です。つまり、世界は「出来事」がまわりの「出来事」と関係することによって生成し続けている、あらゆる「出来事」は固定的ではあり得ず「有機体（organism）」である、というのが「有機体の哲学」を自称するホワイトヘッドの自然科学観と言うことができます。

『科学と近代世界』の「第十二章　宗教と科学」も、そんな自然科学観に基づいて、ホワイトヘッドの主張は展開されています。

ホワイトヘッドによれば、「出来事」の非常に異なった面を扱うのが宗教と科学で、両者の対比について「科学は自然現象を規制すると思われる一般的諸条件にかかわりを持ち、これに反し宗教は道徳的・美的価値の観想に没頭する。前者の側には重力の法則があり、後者の側には聖美の観想がある。それぞれ互いに一方の見るものを他方は見落としているのである」と示しています。

そして、歴史的に見たときの大きな二つの事実として、「第一には、宗教と科学との間にはつねに闘争があったということ」「第二には、宗教も科学とともにつねに不断の発展状態にあったということ」を指摘しています。第一の方は、地動説、進化論などがわかりやすい例としてあげられていますが、第二の方について、初期のキリスト教に遡り、宗教の教えが科学的な信念の変化に「自ら調子を合わせた」とホワイトヘッドは述べています。そればかりか、「個々の神学者たちは強い確信をもって、物理的宇宙の本質に関する意見を聖書から演繹した」例もあるとして、大の旅行家の修道僧コスマス（インドやエチオピアに訪れたこともあり、晩年はアレクサンドリアに暮らしていたという人）が『キリスト教の地誌』（紀元 535 年）と題する書物で、「世界は長さが幅の 2 倍ある平たい平行四辺形である」と主張したという（今となっては）面白いエピソードも紹介しています。

そのうえで、「いかなる科学者も、ガリレオの信念や、ニュートンの信念や、あるいは十年前の自分が抱いたすべての科学的信念に、無条件に賛成はできないであろう」として、科学は宗教以上に「変わりやすいもの」であることもまたホワイトヘッドは指摘しています。その科学の変化に対して宗教の方も変化していかなければならないというのがホワイトヘッドの見解で、「宗教が自然の事実とかかわりをもつかぎり、これらの事実を見る観点は科学知識の進歩につれて絶えず修正されなければならない」し、「宗教の諸原理は永遠的なものであろうが、これらの原理の表わし方は絶えず発展しなければならない」と述べています。要するに、宗教と科学が闘争の中で相互発展する関係にあるべき、というのがホワイトヘッドの主張と言うことができるかと思います。

けれど「過去二世紀以上にわたって宗教は防御の立場に立ってきており、しかもその防御力は弱いものであった。この期間は先例のない知的進歩の時代である」とホワイトヘッドはその当時（今からおよそ百年前）の時代を捉えました。…宗教と科学の関係について、それからの百年はどんな時代だったと捉えることができるでしょう？　2026 年の現在が「宗教と科学が相互発展する関係にある時代」と言えるのか…本書を通して問い直してみるのはいかがでしょうか？

佐藤えり

特集 イラン戦争の下で高市政権を考える

【反戦カフェ②】丸川哲史さんに聞く(前編) 高市「台湾有事＝存立危機事態」発言、両岸関係、イラン戦争と中国…

前号に掲載した兒島峰さんへのインタビューから思いついた「反戦カフェ」。今回は、丸川哲史さんにお付き合いいただいた。丸川さんは明治大学政経学部教授。研究テーマは、現代の大陸中国、台湾、日本における芸術運動、思想運動。台湾映画の研究者としてご存知の方も多いのではないだろうか。『台湾、ポストコロニアルの身体』(青土社、2001 年)など著書多数。池田のお勧めは、『思想的課題としての現代中国』(平凡社、2013 年)。春日町図書館でも借りられます！　次号に後編を掲載します。

池田　「台湾有事＝存立危機事態」発言が出たその時に即思われたことは・・・。

丸川　外務省が用意したものから逸脱していると、直感的に感じました。その次に考えたのは米国が、どう捉えるか。米国と中国は、ディールをずっとしてきている。米国は、日本政府が自身のコントロールの範囲内であるかどうか、そこを注視するのだろう、と思いました。

田中角栄の系譜の政治家、例えば、石破のような政治家は、1972 年の「国交正常化文書」をずっと基準にして動いてきていて、外務省の方でも、そういった文脈を基にするとそんなに失敗がない、という感覚だったと思います。田中角栄含め、自民党のある世代－戦争の記憶がある世代－の人たちは、中華人民共和国と国交回復が為されてよかったと思った。ただ、「国交正常化文書」の台湾を中国の一部であることを尊重し理解する、この文言について、「台湾の帰属は未定である」と解釈する人たちもいるし、外務省もそのように解釈している。端的に、岸系統は、日中国交正常化が嫌だっただろうなと思います。その綱引きが、70 年代からずっとあるわけなんです(その中で福田赳夫はやや例外でした)。そのバランスみたいなものが崩れるというような意味合いが、高市発言にはある。全く戦争の記憶のない世代が出てきた時に、反射的に出てきたということですね。以上、高市発言について、一番初めに思ったことです。

池田　台湾民衆をすっ飛ばした論議になっているように思うが、どう思われていますか。

丸川　質問の「台湾民衆」というのは、どういう風な人たちを想定しているんでしょうか。

中国の軍事行動が身近で起きていることも含め、日本と違う磁場にいるだろうな、とまず考えてみる。それはまた韓国とも違う。例えば、台湾には米軍の通信基地あると言われているんですけども、韓国のような戦闘型の米軍基地はない(1979 年の米中国交樹立の条件として、北京政府が米国に申し入れた結果)。台湾の文脈において、「不安だろうな」と思います。ただ、その不安の中にいろんな成分が入っていて、それを解析する必要がある。

日本の本屋さんに行くと、いわゆる反中本がたくさんありますね。台湾で売られているのは、日本から輸入されて翻訳された反中本です。台湾人自身が、台湾でずっと過ごしている学者とかが、ああいう本を書くことはまずない。韓国も同じです。日本の書店にあるような朝鮮民主主義人民共和国を誹謗中傷する本はありません。ひとつの理由は、韓国の国家が管理すべき事なので、民間社会が勝手には扱えない。韓国に行った時に韓国の学者から言われたのは、「しかし、私たちには「北も同胞」という感覚があるが、日本にはないだろう」と言われました。

台湾の場合もやっぱり似たようなことが言える。大陸中国、中華人民国との関係性っていうのは、色んな複雑な微妙な経緯を含んでいるわけです。例えば、1945 年からのプロセスで内戦に敗れた国民党、中華民国の国民としてやってきた人たち(通称：外省人)は、故郷はどこかって言ったら、お墓とか含めて大陸の側にあった。その一方、いわゆる台湾内部の「本省人」と言われている人が人口的には、八十数%ですね。その人たちは、定義的には日帝時代から台湾の社会で過ごしていた人たちで、家族の歴史として、台湾の植民地時代を知っている。微妙に歴史の受け取り方のニュアンスが違います。大陸中国とどういう関係性で自分たちの位置を定めるかっていうことに関して、1990 年代以降の経済交流も含め、台湾内部には微妙なグラデーションが存在するということになります。

また世代によっても違いがあります。どこから来たかということはもう関係ないよっていうような若者も存在します。一方で、長く続いた国民党政権の下で教育された観点をずっと維持している人もいる。中華民国の仮想された大陸まで伸びた地図の中で台湾はその一部ですよ、っていう認識でした。しかし 2000 年代以降の民進党政権になりますと、教育の中の地図が大変化を起こして、その世代は初めからの独立派(天然独立派)、ということになります。すると、世界史が一番上にあって、その下に中国史、台湾史が別々にある、というような教科書の編成に変わります(それまでは台湾は中国[中華民国]の一部でした)。

ところで台湾の正式の国の名前は、(未だに)中華民国です。日本で中華民国っていう国の名称を使う機会がほ

とんどなくなったので、みな無くなったものだと思い込んでいますよね。しかし法理上、大陸の中国中華人民共和国と中華民国は対峙状態です。だけど、上位概念としての「中国」を持ち出すと、「中国の一部としての台湾」となって、中華民国っていう名前を使わなくても済んでしまう。しかし、中華民国は台湾で実在している。

歴史的な精神分析の視点で考えますと、日本人が「台湾」という言葉を使う時、無意識のうちに、日帝時代——「台湾」という名称が無論存在していた——との繋がりがやっぱりあるのではないかな、と思います。

池田　植民地支配責任が閑却されていることが問題だと思っているのですが・・・。

丸川　日本人が「台湾」という時に、「中国じゃないもの」っていう感じの言語構造に入ってしまう、ということですね。たとえば、戦後の輸入品として「台湾バナナ」って言いましたよね。「中華民国バナナ」とは言わない。戦前は日帝の一部であった台湾から農産物を「移入」していた。戦後は「輸入」ということになって「台湾バナナ」となった。日本人はそういった台湾イメージをずっと持続させたということになると思うんです。

総じて、「中華民国」が実は台湾に残っている、このことの意味を問わない弊害というものがあるわけです。中国の概念で言えば、「古い中国」っていうのは基本的に清朝でした。「新しい中国」っていうのは、20 世紀前半まで中華民国だった。日本の中で日中友好運動している人は「新しい中国」というのは中華人民共和国だという風に一応考えて活動していました。そうすると、台湾=中華民国の歴史性が日本人から分からなくなるっていうことになる。日本の側から台湾に対する植民地支配責任を問うという時に、なかなか問うことが難しいことの背景には、そのような無意識というものがある。日本人が気付かない台湾=中華民国の側面です。

さらに、もう少し詳しく述べてみます。国民党は戦前には台湾にはいなかった。国民党統治時代の歴史教科書の記述には植民地時代が少ない。むしろ大陸時代の抗日戦争に重点が置かれていた。民進党時代になってから、大陸中国にかかわる記憶や知識から遠ざかり、中華民国の記述が相対的に少なくなった。その一方、植民地時代の記述は増えるには増えた。しかし、韓国よりは薄い。台湾では、1895 年からの数年が一番強い武力抵抗期は、大体 1920 年代収まって、それ以降は「議会設置請願運動」のように条件闘争に移行します。逆に韓国、朝鮮では、1919 年の三. 一の抵抗運動が起点になります(そこから満州を拠点にしたゲリラも出て来ます)。台湾において武装抵抗闘争をやっていたイメージは、1945 年の時点では、二世代前、おじいさんおばあさんの記憶になっていたということになる。その辺も含めて、台湾で植民地時代のことを語るっていうのは、朝鮮半島とまたちょっと違うスパンを持つことになる。しかしそれが、同一に近いものに見える時もありました。1991 年にいわゆる韓国の元慰安婦のかたがカミングアウトしましたね。同時期に台湾でも似たようにカミングアウトした元慰安婦の方々がいました。同時期に民主化されて、抑圧された記憶の中から、同時期に歴史記憶が語られるようになった。韓国と台湾は並行して、そのような記憶の問題を扱うようになった、とその頃の私は観察していました。

さて、中華圏では、大陸中国と台湾の間の関係を「両岸関係」というのが一般的です。「中台関係」というふうに表現するメディアはありません。日本独特というか、あるいは欧米でもそうですね。しかし植民地時代のことを考えどのように扱うかという時に、台湾の磁場いうのは、この両岸関係というものに非常に拘束されているので、それによって植民地時代を語ること自身が非常に複雑なものになるわけです。植民地時代においても、台湾の人々は、常に大陸で起きていることに敏感に反応していました。中国共産党の成立も、台湾での自生の(微温的な抵抗組織である)台湾文化協会の成立も、ウィルソンとレーニンのテーゼを受け、同じ 1921 年の成立でした。

ご存じのように、日本では、台湾の植民地支配を美化するような本が多く出版されています。台湾の中で(中国からの)独立を目指す運動者は、それを基点にして、また利用している側面もある。いわゆる台湾の近代化の根っこは日帝時代になる、という言説で、それによって「中国」を牽制するわけです。しかし、これにはいろんな反論があります。例えば日本が初めて鉄道したっていうのは、違いますね。清朝時代に、近代化を目指していた洋務運動の流れで、台湾でも鉄道を引き始めていた。いろんなインフラの準備もしています。例えば、電信線の敷設。実は大陸と台湾の間で繋がっていました。ご存じのように。治水事業を日本がやったことに感謝するという言説があるわけですが、清朝近代化が続いていれば、それは為されたのではないか、と類推することもできます。しかし、最近だと、安倍晋三が中華人民共和国を牽制してくれる人だっていう形で銅像を建てるとか、あるいは記念館のようなものが設立されている。これはもちろん、韓国ではありえないですよね。

私は、最近、国民党か民進党かという政治的党派性の名称ではなく、よりクリアーに物事を分析するには、独立派という名称とともに、中華民国派といったカテゴリーも必要なのではないか、と思っています。民進党は綱領で台湾独立を目指すと書いてある。しかしそれができないで、中華民国体制がずっと続いている、民進党の活躍もその内部においてなんです。独立できないのは、単に大陸中国(人民共和国)に脅されているからだけではない。台湾人の選択として、中華民国というシステム自身が動き続けている、と認識する必要があると思います。

総統府直属の最高学術研究機関である中央研究院には、中華民国派が多い。中央研究院は、実は興味深いことにソ連方式なんです。蒋経国がソ連に留学していたからです。彼が作った特務機関も、ソ連の特務機関にかなり似ている。国民党自身が 1925 年ぐらいにソ連方式に近い形に整備されています。民進党は野党ですが、最も身近にある競争政党である国民党を真似ることになりますから、例えば民進党でも中央委員会があります。つまり、ソ連的なものがかなり入っている。台湾内部には、複雑で日本人があんまり想像してないようないろんな政治的制度とマインドの地図があって、それが入り組んで成立しているわけです。

いずれにせよ、日本に足りないのは、(中台関係ではなく)両岸関係として考える中華圏の人たちの歴史感覚ですね。一方、日本人は、自身が考えやすい想像のパターンで考えちゃうということになってしまっている。その根源を遡ると、先ほどの繰り返しになりますが、やはり日本が台湾を日本の一部として統治していたっていう背景意識があるのでしょうね。

池田　現在の民進党政権との関係を自民党・高市政権は深め、元統幕長が行政院顧問を務めているなど、現在の日本の台湾シフトとも思える動きをどう思われていますか。

丸川　その辺もやっぱり私も興味深く思っています。

50 年代に白団という日本人の旧軍人団が、台湾に逃げのびてき国民党軍をもう一回訓練し直した。蒋介石自身が日本陸軍系の学校を卒業している経緯もあります。この白団のように、国民党も日本との関係でも、ある種の後ろ暗い黒歴史がある。背景には、日本と同じく冷戦構造化の西側に位置づけられ、大陸中国の共産化を止める場所とされてきたことが大きかった。今日、相対的には、国民党よりも民進党の方が「反共」になっています。

さて、日本と大陸中国の関係が良かった時期、80 年代から 90 年にかけて海上自衛隊の自衛官が、人民解放軍と交流していた時期もあった。ソ連が解体し、中国はまだ軍事的な脅威じゃない時期で、定期的な交流が存在していました。防衛大の教官も交流していた。自衛隊や防衛大の中で、二〇一〇年代以降に、シフトの変化があった可能性がありますね。防衛省の中で、人民共和から離れる遠心力が強く働くことになった。逆に、台湾をもう一回再評価するみたいな形になっている(その時期がちょうど、民進党の躍進期です)。

もう一度、戦後日本の文脈に戻ります。岸派的な外交路線です。つまり 72 年の段階で岸とその周辺はおそらく、日中国交正常化に対してかなり批判的だった。大陸中国と国交を結ぶべきではなかった、という歴史観を継続的に持っているんじゃないかと。ただ福田赳夫内閣は柔軟で、全方位外交と言っていました。しかし岸派そのものは、基本的には完全に反共派で、72 年からもずっと四〜五十年間、反共冷戦シフトをずっと維持してきたように見えます。それを背景に、日本の保守派の議員が台北の方に行く構造というのが、大陸中国との関係がよろしくない今日に、大きく復活してきたんだと思います。

自民党の元々の台湾の政治家との付き合いの議員のグループの名称は(日台ではなく)「日華議員懇談会」ですよね。1952 年に日華平和条約を中華民国政府との間で結んだ。その「華」です。一方、中華人民共和国との付き合う議員グループの名称は「日中友好議員連盟」。中華人民共和国と中華民国が、中国の枠組みの中で国連加盟の正当性を争っている名残がずっと存在していている。しかしその一方、中華民国(台湾)っていうのがないかのようにして振る舞っているわけです。つまりここで強調している「両岸関係」というものですが、その語彙が有しているのは、これが内戦から派生した事情である、ということです。「両岸関係」は、1949 年、内戦の末期も国民党政権が台湾に首都を移すっていうところから始まった。中華世界の中では、すべてその延長線上で歴史の推移があり、それを基底に据えて議論する構造を持っています。私は、もちろん今日の大陸中国側の軍事行動には賛成しません。が、「内政問題」とする歴史的な根拠はある、と考えています。

池田　現在の「両岸関係」はどう見ればいいのでしょうか。

丸川　軍事覇権、政治覇権、経済覇権、制度覇権など、四つぐらいの要素があって、それを全部一つにまとめて敵と味方っていうふうにするのはあまり正しくないと思っています。

そこで経済覇権から話してみましょう。常時大陸中国で経済活動をしている台湾人が、数十万人もいます。その人たちを人質にとって両岸がものすごい戦闘状態になるとは、今のところ考えられてはいない。台湾は 80 年代に高度成長して、工場を移さなければならない時期が 80 年代後半から 90 年代に到来した。丁度良い時に「民主化」が起きて、大陸への資本進出が自由化された。そこで中国語も通じるわけです。当時は、香港を経由して台湾投資が大陸の対岸——といっても福建省は工場を建てる条件が今はありますけど昔はなかったので——広東省、浙江省に工場をいっぱい立てた。台湾企業が大陸に投資したのは、工場を建てることが目的でした。そこで生産して利益を得る。それで台湾も不況から脱出できた。そこにうま味が発生して、20 年ぐらいが続いたということになります。

最近は、工場プラント型の産業構造から大陸中国自身がまた離脱し始めている中で、大陸の外側に逃げたりしもしており、うま味がやや後退していることは明らかです。プラスチック工場とかは、もう大陸の中にない。しかし興味深いことに、大陸中国で稼働していた台湾企業と中国企業が、一緒にベトナムに移ったりしている。こうした状態を抱えたまま、全面戦争になるとは、私には考えられません。それと台湾には、TSMC という半導体の会社の工場がありますが、その部品がないと大陸中国はハイテク製品を作れません。台湾を攻撃すれば、大陸の現在の生産体制にとって、かなりダメージが起きることが予想されています。これは通称「シリコンシールド」(ハイテクチップによる盾)と称されているものです。その意味で、TSMC の日本へ米国への移転を全面的かつ性急にしない理由も、そういうところにあるようです。全部移転してしまえば、台湾にとっての「盾」もなくなるからです。

その一方で、大陸側の軍事方面の話をします。大陸側は戦時的な準備をしていません。軍を移動させなきゃいけない対岸に近いところ、その近辺での大きな兆候は見受けられません。可能性として「ある」ということは、大陸の人民共和国も言っています。大陸中国が台湾侵攻する確率はゼロとは言えない。しかし、基本は米国の出方によってですね。「両岸関係」の帰趨が米国のヘゲモニー戦略を最も大きな関数にしていることは自明のことです。日本の中での対中認識も、基本的には米国の態度(覇権認識)との関数関係である、と思います。それと、日中が蜜月だった時期(1980 年代)は、大陸中国がまだ貧がしかった時期ですね。しかも、ソ連が共通の「敵」だった。この時期には、人民共和国と米国は非常に仲が良かった。

1990 年代後半から 2000 年代にかけての江沢民時代に、米国と中国がお互いに警戒心を持ち始めた。2001 年、海南島付近の南シナ海上空で、米軍機と中華人民共和国の軍用機が空中衝突し、米軍側偵察機も損傷して海南島に不時着するという事故が起きた時、大陸の中で初めて反米運動が起きた。それまで反米運動はありませんでした。天安門事件の際の学生風俗を見ればわかりますが、80 年代を過ごした学生の中ではアメリカンドリームが存在していました。90 年代もその余波あって、天安門事件で追いつめられた学生が香港経由でイギリスや米国にいっぱい逃げました。大陸中国人にとって、米国はいい場所であるっていう感覚が 2000 年くらいまではずっとあったように記憶しています。

90 年代後半から 2000 年代に、それが変わった。端的に、中国自身が経済的な自信を持ってきた時期です。2001 年には、ＷＴＯにも加盟した。国際的な貿易体制の中に自分が参入でき、自分の手でサプライチェーンを切り開くことができると自信が出てきた。世界的な交易システム、その体系に入り込んで、徐々に自身の有利な規範(ルール)へと書き換えようとして今日があります。これを制度覇権と呼んでよいのでしょう。その時、この制度覇権への意思は、やはり軍事覇権にリンクすることになります。ご存じのように、自身に有利な交易空間の確保を目的として、米国の海洋ヘゲモニーをどうにか遠ざけたいということで、スプラトリー諸島における基地建設が始まります。

元々大陸中国は、陸において発展した軍事モデルであったわけです。しかし 90 年代から海の方にも関心を持つようになった。その海洋モデルはやっぱり米国なんですね。人民解放軍に近い関係者が米国に渡ってもろもろ学んでいたことは明らかです。中国の中で最も一番権威のある軍事地政学者は、中国のマハン※と呼ばれている人です。

※マハンは、アメリカ合衆国の海軍軍人、地政学者。海洋戦略、シー・パワーなどの研究で著名。

2022 年にペロシ米下院議長が台湾を訪問した際に（それから何回かありましたけど）、中国が軍艦を派遣し包囲した。そういう行動が可能になった。これはやっぱり海洋地政学的な理論に基づいている。この時に米軍は何していたかというと、基本的には台湾周辺エリアに向けて動いてない。かなり退いたところに待機していました。大陸中国側は、軍事的なプレゼンスを見せつけ、このエリアでの米軍の行動を抑えるっていうことを何日間か続ける。そういう行動をとって、米国の出方を観察している。沖縄本島にもちろん米軍基地ありますけれども、僕が見たものでは、大きな艦隊で台湾海峡に入り込もうとするような動きはありませんでした。奄美大島ぐらいです。台湾からすると、米国は傍観しているように見える。その「危機感」が台湾の中にいろんな形で跳ね返ると思います。「本当に守ってくれるのか」という疑惑で、近年では「疑米論」と言われています。

池田　イラン戦争の影響は・・・。

丸川　中国は石油、天然ガスを大量に輸入しなくてはならないけど、実に日本よりも分散型になっている。一帯一路には、海のコースと陸のコースっていうのがあって、いろんな形でホルムズ海峡を通らなくてもいいルートがあって、幾つかパイプラインも引いており、多角的になっていることは明らかです。ホルムズ海峡が封鎖された場合、日本では重油のガソリン缶一ガロンあたりの値上がりは 20 円ぐらいだって言われていたんですが、中国

は大陸中国では 10 円ぐらいだって計算されている(録音時よりももっと上がっている可能性がある)。日本と中国を比べると、中国の値上がり幅は約半分に抑えられる、と計算されているようです。もちろんロシアからの輸入も入ってきていますから。サウジアラビアからも買っていますが、経済的に一番面白いのは、サウジアラビアとの間でドル建てではなく、人民元建てになっているということです。

ご承知の通り、イラクの政権が取り換えられ、またロシアの影響下にあったシリアのアサド政権が倒れたり、米国のヘゲモニーが増している印象もありますが、そうとも言えないんですよ。

例えば、パキスタンは中国と親しい友好国です。パキスタンのグワダル港は、中国がいろんなものを持ち出す港になっています。既に、グワダル港からウィグル自治区のカシュガルまでの間で巨大インフラ建設が進んでいます。けれども、印パの係争地であるカシミールが付近に存在もしている(中国もカシミール地方に面しているので)。一方、中国もインドとは、ご存じのように仲が悪い。ですが、アフガニスタンを真ん中にした地図を見ますと、アフガニスタンも中国と交通路で繋がっている。アフガニスタンの現在の政府にとっては、最も大きな後ろ盾は中華人民共和国ですね。

大陸中国は、いろんな形で地政学的に、優位性の確保を着々と進めている。もちろん米国が巻き返ししようともしている。直近のイラン攻撃が中国のことを意識していたかというと、今回、私はそんなには関係ないかなとは思っています。ただ、政権を転覆させれば中国への輸出が止まるだろうっていうぐらいの思惑はあったと思いますね。でも、米国(とイスラエル)からのイラン戦争は、現時点ではあまり上手くいっていない印象です。

(録音時時点 2026 年 3 月 15 日)。



反戦カフェへの招待

不定期で、反戦カフェ@藍苑を開催することを決めました。限定５名。
参加希望者は、090－5208－5803（池田）に連絡してください。
ゲストに 30 分程度お話をしていただいて、歓談。
お話の内容は、本紙面で報告する予定です。
次回の反戦カフェは、5月 22 日(金)19:00。
お話してくださるのは、田原牧さん（東京新聞論説委員兼編集委員)。
テーマは、イラン戦争と米国(仮)

☚丸川哲史さんと藍苑オーナーの佐藤えりさん

【読者の声】としまる(小倉利丸)さんより

佐藤えりさんのペンローズの「皇帝の新しい心」についてのエッセイありがとうございます。こうした関心をもつ人が運動の世界にいることがとても心強いです。ペンローズのこの本はずいぶん前に読み、ついでに「心の影」もチャレンジしましたがこちらは難しかった。ペンローズのこの本は、AI についてあれこれ考えるきっかけになった本のひとつです。

ペンローズは人間の意識は非アルゴリズム的なところがあると主張します。これはアルゴリズムに支配されている AI は外見はともあれ本質的に人間とは全く異なるものだということで、私はこの考え方に共感しました。しかも今学校教育では、アルゴリズム的な問題解決手法が支配的なようで、困ったものだと思っています。ぼくは左翼フロイト派なので、人間の非アルゴリズムの側面は無意識と弁証法的な判断に関わると感じています。AI との最後の対決の場は、AI フェティシズムという人間自身との闘い(資本論でマルクスが貨幣のフェティシズムで論じたことがそのまま AI に当て嵌まる)ですが、他方で、アルゴリズムと弁証法の対決であると同時に「無意識」をめぐる攻防だと思っています。ずいぶん前に読んだ本ですが、もういちど読みなおそうかなと思いました。佐藤えりさんにもいろいろ教えていただきたいです。よろしく。

【編集後記】

原稿執筆者が増えて、嬉しい悲鳴！　状況が急変するので、「特集」のコンセプトが上手く作れない。

次号では、国家情報局創設、防災庁創設、国旗等毀損罪、「旧姓単記」制度導入・・・「悪法ラッシュの通常国会を撃つ」でいこうと思っているのだが・・・。